

ガザル (2) ——イクバルのウルドゥー詩 (12) ——

松村 耕光* 訳

はじめに

本稿は、ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal 1877-1938) のウルドゥー第2詩集『ガブリエルの翼 (*Bāl-e Jibrīl*)』に収められている定型抒情詩ガザル (*ghazal*) 15篇の翻訳である。

『ガブリエルの翼』は、1935年にラホールで出版された、イクバル円熟期の詩集で、ガザルの部、四行詩 (*rubā'ī*) の部、ナズム (*nazm* 何らかの主題について書かれた詩) の部の三部で構成されている¹⁾。

ウルドゥー第1詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā* 1924年)』は、詩の作成時期によって3部に分けられ、それぞれナズムの後にガザルが配置されているが、この『ガブリエルの翼』では、ガザルが最初に配置されており、ガザルの部は詩集全体の半分近くを占めている。『鈴の音』所収のガザル同様、この詩集でもガザルは、恋愛を主要主題とする伝統的なものとしてではなく、思想表現の手段として用いられている。

ガザルの部は、基準は示されていないが、二つの部分に分かれており、第1部には16篇、第2部には61篇のガザルが収録されている。本稿では、第1部から10篇、第2部から5篇選出して翻訳した。

* 大阪大学大学院言語文化研究科教授

1) 各部に断片詩 (*qit'ah*) が挿入されている。
尚、『ガブリエルの翼』所収の有名なナズム2篇は本誌に紹介済みである。
「コルドバのモスク (*Masjid-e Qurtubah*)」第3巻2号(2010年)。
「サーキー・ナーマ (*Sāqī-nāmah*)」第4巻1-2号(2011年)。

ガザル (1) ²⁾

星の動きがおかしいとしても——天はあなたのものか、私のものか
 世界のことなど気になろうか——世界はあなたのものか、私のものか³⁾
 天上界にもし恋の騒乱がないのであれば
 それは誰の落ち度なのか——おお、神よ、天上界はあなたのものか、私のものか
 世界最初の朝、あの者にどうして拒絶する勇気があったのか
 私にどうして解ろう——あの者はあなたの秘密を知っているのか、私の秘密を知っているのか⁴⁾
 ムハンマドはあなたの預言者、ガブリエルはあなたの天使、コーランはあなたの啓典である
 しかしこの甘美な言葉が伝えているのはあなたの^{おもい}意思なのか、私の^{おもい}意思なのか⁵⁾
 この星の輝きのおかげであなたの世界は明るく輝いている
 土塊に過ぎぬ人間の衰亡——それはあなたの損失になるのか、私の損失になるのか⁶⁾

ガザル (2) ⁷⁾

輝く巻き毛を一層輝かせ
 理性を捕え、心を捕まえて欲しい
 恋も美も隠れているとは——
 あなたは姿を現すべきである、そうでなければ私に姿を現させて欲しい⁸⁾
 あなたは無限の大海であり、私はちっぽけな小川である
 私を抱きしめて欲しい、そうでなければ私を無限にして欲しい
 私は貝であり、その真珠の名誉を守るのはあなたである
 私はつまらぬ存在であるが、私を高価な真珠にして欲しい⁹⁾
 新春の歌が聴けぬなら

2) 初句 Agar kaj-rau haiṁ anjum āsmān tērā hai yā mērā.

3) 「あなた」 神を指す。

4) 「あの者」 悪魔のこと。悪魔は神の側にいて神の秘密を知る者であったが、神の命令を無視し、アダムに跪拝しなかった。

5) 「ガブリエル」 天使ガブリエルは神の啓示を預言者にもたらす役目を担っていた。
 「この甘美な言葉」 美しい詩句を意味するのではないかと思われる。私の甘美な詩は私が生み出したものなのか、それともあなた(神)が私に授けたものなのか、私には解らないということであろう。

6) 「この星」 人間のこと。

7) 初句 Gēsū-e tāb-dār kō aur bhī tāb-dār kar.

8) 「恋」は求愛者たる「私」、「美」は恋の対象たる「あなた」を意味する。「私に姿を現させて欲しい」とは、私のあなたに対する愛を世に示させて欲しいということ。

9) 「その真珠の名誉を守るのはあなたである」 真珠(自我)を守り、輝かせるのはあなた(神)であるということ。

焰の消えかけているこの息を春の到来を告げる鳥にして欲しい¹⁰⁾
どうして私を天上の楽園より旅立たせたのであろうか
やるべき仕事が多過ぎる——どうか待っていて欲しい¹¹⁾
最後の審判の日に私の行動記録が出されたら
あなたにも恥じ入って欲しい、私も恥じ入らせて欲しい¹²⁾

ガザル(3) ¹³⁾

説得力があるかどうかは分からぬが、私の嘆きを聞いて欲しい
正義を求めているのではない、このこだわりのない僕は^{しもべ}
一握りの土があり、嵐があり、広大な世界がある
あなたの世界創造の意欲を恩恵と言うべきか、虐待と言うべきか¹⁴⁾
薔薇の天幕は花園を吹く風に堪えられなかった
これが春というもののか、これが順風^{はるかぜ}というもののか
私は欠点だらけの余所者である
しかし天使たちはあなたの荒野に賑わいをもたらすことはできなかった¹⁵⁾
私の努力を喜んでくれている
あなたが創った荒野、転変する世界は¹⁶⁾
危険を好むこの性格にはふさわしくない
獵師が待ち伏せていないような花園は
天使たちは恋する力を有さない
恋することができるのは勇気を持つ者だけである¹⁷⁾

ガザル(4) ¹⁸⁾

借り物の命で恋することなどできようか
儂い者は永遠不滅の者に恋することなどできようか¹⁹⁾

10) 新しい時代を見ることができないのであれば、せめて自分に新しい時代の到来を告げる役目を与えて欲しいということ。

11) アダムの楽園追放の物語に基づいている。

12) 「あなた」神を指す。人間に罪を犯させてしまったことを恥ずかしく思って欲しいということ。

13) 初句 *Athar karē nah karē sun lē merī faryād.*

14) 「一握りの土」人間のこと。

15) 「あなた」神を指す。世界に活気をもたらしたのは、天上の楽園から追放された人間であるということ。

16) 世界に活気をもたらした人間に世界が感謝しているということ。

17) 人間には神を恋する能力があるということ。

18) 初句 *Kyā 'ishq ēk zindagī-e musta'ār kā.*

19) 人間は神を恋することができようか、ということ。

その焰がすぐに吹き消されてしまうような恋——
 そのような恋では想い焦がれる懊悩をたっぷり楽しむことなどできようか
 私など一瞬輝くことができるだけである
 火花に焰の相手は務まらぬ
 まず私に永遠の命を授けて欲しい
 そして悶える心の一途さを見て欲しい
 永遠の痛みをもたらす棘で刺してもらいたい
 神よ、永遠の疼きを授けて欲しい

ガザル (5) ²⁰⁾

酌人よ、世界は変貌し、星々の動きが早まった
 今や万物の原子の奥底に終末の日の大騒乱が生じている²¹⁾
 神の僕たちの信仰と学問の富が奪われた
 酌人よ、どの異教徒が流血をもたらす秋波を送ったのか²²⁾
 昔から続く病、心の動揺——
 酌人よ、癒してくれるのはあの歓喜をもたらす液体だけである
 聖地の心に願望の焰が生まれないのは
 酌人よ、おまえが姿を見せないからである
 ペルシアの花園に再びルーミーは生まれなかった
 酌人よ、イランの風土もタブリーズも変わってはいないのに²³⁾
 イクバルは自分の荒れ果てた土地に絶望していない
 酌人よ、少しの水さえあれば多くの作物を生み出すことができるからである
 路傍の乞食である私に国家統治の要諦が授けられた
 酌人よ、私の歌声はパルウェーズ王の全財産に値する²⁴⁾

ガザル (6) ²⁵⁾

酌人よ、もう一度あの酒と盃を持ってきて欲しい
 そうしてくれれば私は元の地位に戻ることができる

20) 初句 Digargūn hai jahān tārōn kī gardish tēz hai sākī.

21) 酌人は、美少年、神、導師などを意味する。酌人の意味に応じて、酌人が供する酒の意味も愛、真理、叡智などと変化する。

22) 「異教徒」 ガザルでは佳人は「異教徒」と表現されることがある。ここでは西欧人を指す。
 「流血をもたらす秋波」 佳人に秋波を送られた者は恋の苦しみで血涙を流すことになる。

23) タブリーズは神秘主義詩人ルーミー (Rūmī d. 1273) が心酔した謎の導師シャムス (Shams) の生まれ故郷。

24) 「パルウェーズ」 サーサーン朝の有名な君主ホスロー・パルウェーズ (Khwusrau Parwēz d. 628) のこと。

25) 初句 Lā phir ek bār vohī bādah-o-jām aē sākī.

三百年間インドの酒場は閉ざされている

酌人よ、今や恵みを行き渡らせる時が来た²⁶⁾

私の抒情詩^{ガザル}の盃に少しか酒が残っていたが

酌人よ、長老は「それもご法度」と言うのである²⁷⁾

探求の森に勇者がいなくなってしまった

酌人よ、神秘主義者と宗教指導者の奴隷だけしか残っていない²⁸⁾

誰が恋の鋭利な剣を奪いさったのか

酌人よ、知識が持つ鞘には剣がない

胸に輝きがあれば、詩の焰は命そのものである

酌人よ、輝きがなければ詩は永遠の死

私の夜から月を奪ってはならぬ

酌人よ、おまえの盃には満月が輝いている²⁹⁾

ガザル(7)³⁰⁾

チューリップの心が真っ赤な酒で満ち溢れると

すぐに神秘主義者は禁酒の誓いを捨て去った³¹⁾

恋が敷物を広げたところ――

そこでパルウェーズ王の後継者となったのは清貧な者たちであった

星も天も古びてしまった――

私に必要なのは真新しい世界である

終末の日にどのように世界が破滅するのか誰も知らないが

あなたが目を動かすと私には終末の日が訪れる³²⁾

早朝に溜息をつく飲びを奪わないで欲しい

愛のこもった目で見ないで欲しい、冷淡さを失わないで欲しい³³⁾

花の季節は悲嘆に暮れる心にはそぐわない

花園の鳥の声は心を飲ばせようとする

「時代に合わせよ」とは愚か者の言うことである

時代がおまえに合わないのなら、時代と闘うべきである³⁴⁾

26) 北インドでイスラーム復興運動を展開し、大きな影響を与えたアフマド・スィルヒンディー (Aḥmad Sirhindī d. 1624) の時代から 300 年間ということのようである。

27) 「長老 (shaikh)」 頑迷なムスリム指導者を指す。

28) 「宗教指導者 (mullā)」 頑迷なムスリム指導者を指す。

29) 「満月」 盃に満たされた酒のこと。

30) 初句 Ḥamīd-e lālah ma'e la'ī sē huā lab-rēz.

31) 花の咲き乱れる春は飲酒に最適な季節とされている。

32) 「あなたが目を動かすと」 あなたが私から目をそらすと、あるいは、あなたが私を見つめるとということ。

33) ガザルの求愛者にとって最大の飲びとは、報われぬ恋に懊悩することであるとされている。

34) 「時代に合わせよ」、「時代がおまえに合わないのなら、時代と闘うべきである」の部分はペルシア語。ラホール出身のペルシア語詩人マスウード・サアド・サルマーン (Mas'ūd Sa'd Salmān d. 1121/22) の「望みが得られないのなら努力せよ / 時代がおまえに合わないのなら、合わせよ」というカスィーダ (qaṣīdah) の句に基づいている。

ガザル (8) ³⁵⁾

私は不運なままであり、あなたは無情なままである
 上手に歌を歌ったが、何の役にも立たなかった
 私は何処にいる、あなたは何処にいる——ここは俗界なのか、天界なのか
 この世界は私のものなのか、あなたの媚態なのか
 ずっと私は葛藤の夜を過ごしてきた
 時にはルーミーの懊悩、時にはラーズイーの煩悶³⁶⁾
 秃鷹の中で、真実を知らずに育った鷹は
 鷹の行動とは如何なるものか知っていようか
 ガザル
 抒情詩の言葉など私は知らぬ——そもそも言葉など私は知らぬ
 ペルシアの音色であれ、アラビアの音色であれ、魅力的な音色が必要なのである
 清貧と王権とは大して違わない
 後者は軍の力を振るい、前者は眼差しの力を振るう³⁷⁾
 隊商から離脱した者がいる、聖地に疑いを持つ者がいる
 隊商を率いる者に思い遣りの心がないからである³⁸⁾

ガザル (9) ³⁹⁾

行動の場は空の下にあると私は思い込んでいた
 水と土との戯れを自分の世界だと思い込んでいた
 あなたが覆面を取り、視界の呪縛は打ち破られた
 一枚の青い布を私は空だと思い込んでいた
 同行者たちは疲れ果て、うねる大気の中に取り残された
 太陽や月や木星を道連れだと私は思い込んでいた
 恋の跳躍は話を一挙に終わらせた
 この天地を無限だと私は思い込んでいた
 恋を隠そうとしたことで恋が明らかになってしまった

と思われる。

35) 初句 Vohī mērī kam-naṣībī vohī tērī bē-niyāzī.

36) ラーズイー (Rāzī d. 925/932) は、理性を重視した、イランのレイ出身の哲学者、医学者。「ルーミー」は愛（信仰）の道を、「ラーズイー」は理性の道を象徴しており、「ルーミーの懊悩」とは神に対する愛の懊悩、「ラーズイーの煩悶」とは哲学的煩悶を意味する。

37) 「前者は眼差しの力を振るう」 清貧を守る者には徳が具わり、眼差しの力で人を心服させることができるということ。

38) 「聖地」 メッカのこと。
 「隊商を率いる者」 ムスリム指導者。

39) 初句 Apnī jaulān-gāh zēr-e āsmān samjhā thā main.

嘆きを抑えていると思っていたが、嘆いているのと同じであった
憐れな旅人の苦悶の声だったのに
出発の合図だと私は思ってしまった

ガザル (10) ⁴⁰⁾

神よ、この転変する世界も素晴らしい場所ではあるが
清純な者や能力ある者たちはどうして蔑まれるのであろうか
その神々しさには商人たちの手も加わっているというのに
人々は西欧人を神と見做している
あなたは見識ある者たちに薬すら与えない
あの者は薔薇とチューリップの園を驢馬に与えているのに⁴¹⁾
キリスト教会には焼肉と紅の酒がある
モスクには説教と忠告の他に何がある
あなたの命令は正しいが、注釈者たちは
解釈によってコーランをパーザンドにすることができる⁴²⁾
あなたの楽園を見た者はいないが
西欧の街は皆、楽園のようである
ずっと私の思考は天空を彷徨っている
もうそれを月の洞穴に閉じ込めてもらいたい
天は私に天使と同じ特性を授けてくれた
私は地上にいるが、土と結びついてはいないのである
神に酔った修行者は東洋にも西洋にも属さない
私はデリーにも、イスファハーンにも、サマルカンドにも住んではない
真実だと信じていることを私は話す――
私はモスクにいる愚か者でもなく、文明に育てられた人間でもない⁴³⁾
身内も他人も私に不満を持っている
毒薬を砂糖とは言えなかったから
難しいことである――真理だけを見、真理だけを念頭に置く者が
塵の山をダマーヴァンドの山と言うことは⁴⁴⁾
ニムロデの焰の中でも私は泣き言は言わぬ
私は信心深きムスリムである――芸香の種ではない⁴⁵⁾

40) 初句 Yā rabb yeh jahān-e guzrān khūb hai lēkin.

41) 「あなた」は神、「あの者」は西欧人を意味する。この詩句はペルシア語。

42) 「パーザンド (Pāzand)」ゾロアスター教経典『アヴェスター』の注釈書である『ザンド (Zand)』の注釈書。

43) 「文明」西欧文明を意味する。

44) 「ダマーヴァンド (Damāvand) の山」イランにある有名な火山。

45) ニムロデ王が偶像崇拜を拒否するアブラハムを焰に投じさせた物語に基づいている。芸香の種は火にくべられると音を発する。邪視除けに用いられる。

私は信仰に燃え、美醜を区別し、善を求め、人を苦しめない
 自由ではあるが囚われており、何も持つてはいないが幸福である
 如何なる時も私の自由な心は満ち足りている
 蕾から微笑む歓びを奪うことなどできようか⁴⁶⁾
 イクバルは神の前でも黙っていることができなかった
 誰かこの無礼な者を黙らせるべきであった

ガザル (11) ⁴⁷⁾

おまえはまだ途上にある——留まってはならぬ
 エジプトもヘジャーズも、ペルシアもシリアも通り過ぎよ⁴⁸⁾
 無私無欲に行動する者には特別な報いがある
 天女や天幕、酒や盃を願うのはやめよ⁴⁹⁾
 西欧の若々しい美しさは魅力的ではあるが
 天翔ける鳥よ、餌の置かれた網には気を付けよ
 山をも砕くおまえの一撃——おまえによって東西は救われる
 新月の剣のように鞘の安らぎは捨てよ⁵⁰⁾
 おまえの指導者は神を知らず、おまえの祈りは歓びを知らぬ
 そのような指導者は避けよ、そのような祈りはやめよ

ガザル (12) ⁵¹⁾

真っ赤なチューリップの灯火によって再び山全体が輝き出した
 花園の鳥は再び私を歌に誘い始めた
 荒野には花が咲いているのか——それとも列をなしているのか
 紫色の衣、青色の衣、黄色の衣を身に付けた妖精たちが
 朝のそよ風が花びらに置いていった露の真珠を
 太陽の光が一層煌めかせている
 独立自存の美がそのペールを外す場所として
 街よりも森を選ぶなら、素晴らしいのは街か森か⁵²⁾

46) 「微笑む歓び」ほころんで開花する歓び。

47) 初句 Tū abhī rah-guzar mēn hai qaid-e maqām sē guzar. 「ロンドンで執筆」と注記されている。

48) ムスリムは地理的境界に囚われず、世界的な共同体建設を目指さなければならないということ。

49) 「天女や天幕、酒や盃」天国で与えられる褒美。

50) 「新月の剣のように」月初めに夜空に姿を現す新月を鞘から抜かれた剣に見立てている。

51) 初句 Phir chirāgh-e lālah sē raushan huē kōh-o-daman.

52) 「独立自存の美」自然の、あるいは神の美。

自己に沈潜し、生命の秘密の手がかりを得るがよい
私には従わなくても、自分自身には従うがよい
心の世界とは——心の世界とは情熱、陶醉、熱中、熱愛
体の世界とは——体の世界とは利得、取引、欺瞞、計略
得られた心の富は失われない
体の富は影である——来てはどこかに去ってゆく
心の世界に西欧人の支配はなく
心の世界に長老やバラモンはいなかった
カランダル
遊行者の言葉は私を恥じ入らせた——
「他人に頭を下げれば、心も体も奪われる」⁵³⁾

ガザル (13) ⁵⁴⁾

自我は大海であり、無限である
それを小川と思うなら、お手上げである
天空の呪縛は打ち破ることができる
それは硝子の建物であり、固い石の建物などではない
自我に潜り、再び浮かび上がる——
無為な者には為し得ない
占星術師におまへの位階が解ろうか
おまへは生ける土塊である——星の僕などではない
ここに天国があり、天女や天使ガブリエルがいる
しかしおまへの目は鋭さを欠いている⁵⁵⁾
私の狂気は時流を察知した
それ故私に裂けていない上着を与えたのである⁵⁶⁾
恩情に溢れているながらも天は出し惜しりする——
紅玉は赤く燃えるが火花は出ない

ガザル (14) ⁵⁷⁾

理性は聞き知っているだけである

53) 「カランダル (qalandar)」 ムスリムの遊行修行者。

54) 初句 Khwudī voh bahr hai jis kā kō'ī kinārah nahīn.

55) 眼力が欠如しているので、楽園がこの世にあることを理解できないということ。

56) 時代が変わったので、かつての狂人のように私は上着を引き裂いたりしないということ。

57) 初句 Khirad kē pās khabar kē siwā kuchh aur nahīn.

おまえの病は眼差しによってしか治らない⁵⁸⁾
 目的地の先にはまだ行くべきところがある
 生きるとは旅する意欲を持ち続けることである
 自我を守ってこそおまえは価値ある存在となる
 真珠には輝きの他には何もない⁵⁹⁾
 血管を血が巡っているだけでは無意味である
 人生とは心の燃焼である
 チューリップの花嫁よ、私を避けてはならぬ
 私は朝のそよ風である⁶⁰⁾
 西欧の商人ががらくたと見做している品物は
 実は技巧を凝らした逸品である
 イクバルは貧しいが慈悲深い——しかし
 焰には火花の他には何も授ける物がない⁶¹⁾

ガザル (15) ⁶²⁾

星の彼方には別の世界が待っている
 まだまだ恋の試練が待っている
 世界は活気に満ちている
 数百もの隊商が動き回っている
 色と香りの世界に満足してはならぬ
 花園は他にもある、巣を作る場所は他にもある
 巣を失っても悲しむことはない
 溜息をつき、涙を流す場所なら他にもある⁶³⁾
 おまえは鷹である——おまえが為すべきこととは飛翔することである
 おまえの前にはいくつもの大空が待っている
 この世の昼と夜とに囚われてはならぬ
 いくつもの時空がおまえを待っている
 今や宴で孤独を感じるような日々は過ぎ去った
 私の秘密を知る者たちがいるからである

58) 導師の薫陶が必要ということ。

59) 真珠の価値がその輝きに基づくように、人間の価値は自我に基づくということ。

60) 私は花を開かせる朝のそよ風であるということ。

61) 「焰」 信仰の焰。

62) 初句 *Sitārōn sē āgē jahān aur bhī haiñ.*

63) 薔薇を恋する夜鶯 (bulbul) という伝統的な比喩に基づいている。薔薇を思って嘆く場所は他にもあるということ。